

簡易版 TP (ティーチング・ポートフォリオ)

氏名	保森智彦
所属機関名	教育学部 初等教育学科
職位	准教授
在籍年	6 年

教育の責任

初等教育の算数科教育を専門に研究しており、本学では「算数科内容論」「算数科教育法」「理数教育の方法と実践」「教育実習事前事後指導」等の授業を担当している。研究活動においては主に小学校現場の教師を対象とした実証的研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」を実現する算数科の授業作り等について支援を行っている。入試広報センター次長の経験を活かし、学部の広報委員として広報活動の推進を行っている

教育の理念

私の教育理念として、1) 現場で活かせる即戦力、より実践的な指導力の育成、2) 他者と関わりながら学ぶ態度、教職への意欲の向上と人間性の育成、3) 生涯学び続ける適応的熟達者の育成、が挙げられる。1) では、算数の教科指導力に関して、授業の具体的な実施方法、学習指導案や板書計画の具体的な作り方について基本的な知識や技能を身に付けてもらいたいと考えている。2) では、将来、どこの職場に就職してもあらゆる他者と違いを認め合い、人間関係を円滑に進めるために、コミュニケーション力やそのための知と人間性等を高めてもらいたいと考えている。3) では、教師自身が生涯学び続ける適応的熟達者でなければならぬため、教師が説明する時間が多い授業をするのではなく、児童が話し合い活躍する授業作りや児童のつまずきを活かす授業作りを探究してもらいたいと考えている。

教育の方法・方針

教育理念1) について、「算数科内容論」においては、単に算数・数学の学問としての講義ではなく、学術的な内容が実際に小学生が使っている教科書と小学校学習指導要領にどのように関連しているか、グループワークを通して協同的に理解し合う問題解決型の授業を行なっている。「算数科教育法」においては、教育実習を目前に控えた3年生に対して、より実践的な演習を行ない、指導案の作成や模擬授業の実施、省察の充実などに取り組んでいる。

教育理念2) について、担当する授業ではグループワークを積極的に取り入れ、学生同士が互いに意見交換しながら主体的に考え、知恵を出し合い、学び合う授業づくりを行なっている。教職を目指す者としての人間性と教職への意欲を高めるため、私自身の実務経験におけるリアルな体験談を話して聞かせたり、子供や保護者、同僚の教員等とトラブルを起こさないための心構えや具体的な行動について教えたりしている。

教育理念3) について、教師の適応的熟達に関する研究を継続して行なっている。教師の適応的熟達とは、児童の状況に応じて指導方法や授業のねらいを臨機応変に変化させる教師への成長である。「教職実践演習」では、算数科教育における適応的熟達者の授業を学生に参観させ、適応的熟達者の教材解釈や指導方略、児童に対する対応の仕方などを考えさせることで、「良い授業とは何か」「自分はどのような児童を育てたいのか」「そのために自分には何が必要か」といった教育信念に関する内容について考えさせている。また、私自身も学び続ける教師でありたいと考え、適応的熟達に関する学生アンケートを実施し、調査の結果を踏まえて毎年カリキュラムを工夫・改善し、授業改善に取り組んでいる。

教育の成果

教育理念1)については、主に「算数科教育法」や「教育実習事前事後指導」において、現場で活かせる即戦力、より実践的な指導力の育成を図っている。具体的な学生の指導案に見られる変容等については次の通りである。春学期前期では「本時の目標が観点に即した内容になっていない」「学習活動や指導上の留意点が曖昧で具体がない」「評価規準と本時の目標が不整合」「板書計画が抽象的であり実現性がない」などが見られた。中期では「学習活動が問題解決的になり、めあてとまとめが整合している」「“見通し”“一人学び”“集団学習”“適用題”などの教育的な用語を用いている。」「指導上の留意点が具体的になっている」「板書計画が具体的になっている」などが見られた。しかし、依然として「本時の目標が観点に即した内容になっていない」「評価規準と本時の目標が不整合」などが課題として残された。後期では「本時の目標が観点に即した内容となり 評価規準とも整合している。」「評価の場面や観点、方法が適切である」「学習活動が実際の学校現場で用いられている形式に近付き、学習活動が問題解決的になっている」「教育的な用語を適切に用いるとともに、図を挿入してより分かりやすくなっている」「指導上の留意点がより一層具体的になり、すぐに授業で指導ができるレベルになっている」「板書計画がより一層具体的になっている」などの成果が見られた。

教育理念2)については、毎年実施している授業評価アンケートの結果では、学生の満足度が常に100%である。学生の授業コメントでは「算数科教育法では、先生の人柄がとても良く、とても気持ちよく講義を受けられました。教育法らしい良い授業であったと振り返っています。私にとっては、指導の視点から考える、算数のもう一つの姿について知ることができたとても良い授業でした。(後略)より実践に近い形でできるこの模擬授業のやり方はとても良かったと思います。他の講義と比べて、(中略)1番この算数が勉強になりました。」など肯定的なコメントが毎年多く寄せられている。また、卒業生からも毎年相談や報告が届いている。

教育理念3)については、学生の適応的熟達化を図るために、授業を想定した内容に関する知識(PCK)の変化を研究している。PCKとはShulman(1987)が提唱し、吉崎(1983)が教師教育研究に援用した「教材内容・指導方略・児童理解」についての知識である。PCKは教師の専門性の中心概念である(佐藤, 1996)。例年「算数科教育法」を受講する3年生の研究同意者にPCKに関する調査を行っており、その成果と課題を毎年、岡山理科大学教育実践研究誌に投稿し公開している。調査の回答から共通して言えることは、受講後の学生の「授業を想定した内容に関する知識(PCK)」は、教師からの視点と児童からの視点でバランスよく変容していることである。保森(2018)は、PCKには教師中心と学習者中心の2つの側面があると述べ、教師が適応的熟達者に成長するためには、それら2つのバランスが重要であると述べている。教職を目指す学生のPCKが適応的熟達者に向けて変容している点は大きな成果であると言える。

今後の目標

短期目標としては、PDCAサイクルに則ったカリキュラム・マネジメントに取り組むことである。授業を行う上で学生に対する形成的評価を丁寧に行い、学生の学修意欲の向上や教員採用試験の合格率を向上させることはもちろん、授業前後の学生の変容を検証する取組みを継続させることである。長期目標としては、1つ目は学生が教師として適応的に熟達していくための授業作りや効果的なカリキュラム開発である。1年生の「算数科内容論」、2年生の「教材分析・開発演習」、3年生の「算数科教育法」「教育実習事前事後指導」等のシラバスについてカリキュラム・マネジメントを行い、より実践的な指導力を育成できるカリキュラムを完成させたい。2つ目は、現場の現職教師の業務改善に資する研究である。AIの進展に伴い、LLM(大規模言語モデル)を用いた省察ツールの開発研究を行っていく。

根拠資料

・児童のつまづきに関する理解が教員養成系大学の大学生のPCKに与える影響、岡山理科大学教育実践研究, 2024, pp.1-13.